Photography 1_WALL Hitotsubo next

第5回写真「1_WALL」グランプリ

清水裕貴 / Yuki Shimizu

Grand Prize REPORT

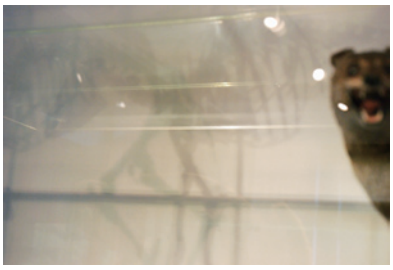
第5回写真「1_WALL」展
2011年9月20日(火)～ 10月13日(木)
公開最終審査
2011年9月29日(木) 6:00p.m.～8:30p.m.

写真の魅力と自身のスタイルを作りだそうとする意欲もかわれ、満票を得てグランプリに！

どこかに連れ出されてしまうようなイメージを湧かせる写真に言葉を添えて物語を紡ぎ出した清水さん。写真と言葉を使って、1年後の個展でどんな展示を見せてくれるのか、期待が集まりました。

受賞作 「tky ↔ almgrd」

「博物館の鳥が語ること、深夜にかかってくる電話、怯えながら荒野を走ること、すぐに帰り道が分からなくなる白い砂漠、雨の気配、冷たい夜に見る夢。決して逃してはいけないとわかるのに、どうして逃してはいけないのかわからない瞬間。それらを集めて物語を紡ぎました。主人公は、行方不明になった大切なものを探して旅をします」



審査員コメント

有山達也

「いい意味で言葉にしづらい。ありそうでない写真で好き。言葉を一緒に展示することについて疑問もあったが、そこに挑戦しているという行為に可能性を感じる。化けるとすごいことになりそうと思わせる魅力がある」

鈴木理策

「本人は写真だけでは伝わらないと言っていたけど、そんなことはない。言葉を一番必要なのは本人で、使うことが自分のつくる部分で大きいと思う。見せ方は難しいけど、無茶な挑戦しがいのある、やっかいなことをしていて、そこがすごくいい」

姫野希美

「写真そのものがとてもいい。写真を見て、こんなにイメージの力に連れ去られることはそうそうない。言葉も魅力的だと思うけど、言葉がなくても成立していると思う」

小林紀晴

「写真と言葉は、見る早さが違うから同時に見ることができない。だから言葉を添えることはすごく不利なことだと思う。きっと言葉がなくても写真だけで成立するが、言葉はぜったいはいっていてほしいと思う」

光田ゆり

「何気ない写真なのに、サブリミナルに浸透してくるような不思議な力を感じる。可能性のある作品だけど、ぴったりな展示方法は、簡単には見つからない。写真の雰囲気ととても似たストーリーにまとめたということで、おもしろい写真集がつくれそうな予感に満ちている」

清水裕貴　Yuki Shimizu

1984年千葉県生まれ
2007年武蔵野美術大学映像学科卒業

FINALISTS ※五十音順

池崎一世
板谷麗
櫻井龍太
清水裕貴
芹川由起子
丸山勇樹

JUDGES ※五十音順、敬称略

有山達也(アートディレクター・グラフィックデザイナー)
小林紀晴(写真家・作家)
鈴木理策(写真家)
姫野希美(赤々舎代表取締役・ディレクター)
光田ゆり(美術評論家)

NEXT 公開最終審査 REPORT

■出品者のプレゼンテーションと質疑応答の概略

芹川由起子 Yukiko Serikawa

「母と刃物」

岡山の実家に帰省する度に母を撮っている。展示したモノクロ写真は2008年に撮ったもので、カラーの写真は最近撮ったもの。母を撮っていると、なんだか刃物もよく一緒に写っていた。なんだか怖い写真なのは、いろんな感情が写り込んでしまうからかもしれない。個展では、母だけでなく家族を撮った作品を発表したい。

〈質疑応答〉

●有山：2008年に撮った時、なぜモノクロで撮ろうと思ったの？

○芹川：色があると美しく見えがちだが、写真を色で誤魔化したくなかったから。

●小林：それなのになぜ、最近になってカラーで撮っているの？

○芹川：最近になって、色があってもいいなと思い始めた。

●姫野：これだけお母さんを写して、あなたとお母さんとの関係に変化はあった？

○芹川：母との関係は変わっていないが、私の中では何かが変わった。複雑な家だけど、それについてあらためて向き合おうと考えるようになった。

池崎一世 Ichiyo Ikezaki

「Our Song」

この作品は私が妊娠した5年ほど前から撮りためた写真をまとめたもの。私は家庭内などいろんな場所で思い通りにならない時、ストレスを感じる時、写真を撮りたいモチベーションが強くなる。家庭的な雰囲気を出したくて、ドアやカーテンを用いた展示にした。

〈質疑応答〉

●小林：家庭的な雰囲気を出したいのに、なぜカーテンは黒と赤なの？

○池崎：柄モノなどいろいろ考えたが、写真を邪魔しない黒にした。赤は女性的なイメージで。

●姫野：プリントの紙がいろいろあるが、何か意図があるの？

○池崎：ランダムな感じを出したくて。ライトに照らされて透ける紙を探したりした。

●菅沼：あえてチープな展示にしようと思った理由は？

○池崎：父親がアートをやっているのがストレスだった。アートに対する反感もあるし、チープなプリントのクオリティも好き。

櫻井龍太 Ryuta Sakurai

「Mを撮る」

Mという女性を3年間ほど撮っている。Mとはインターネットを通じて知り合った女性のハンドルネーム。撮影中は撮影者と被写体の撮りたい撮られたいという欲望と衝動が渦巻いて高揚しハイな状態になる。はみ出すような制御できない感覚を表現したくて、1枚だけ突出した展示にした。

〈質疑応答〉

●小林：ポートフォリオは点数が多くバラエティに富んでいたが5枚だけ展示した理由は？

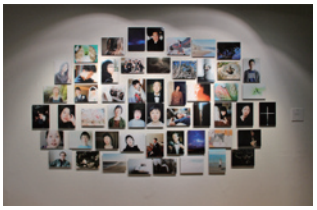
○櫻井：できるだけ強く見せたかったので、数を減らして1点1点を大きくした。彼女の本質に迫りたくてヌードを1点入れた。

●光田：このMさんと1対1で向き合った写真を発表して、どんな人に見てもらいたい？

○櫻井：できるだけいろんな層の人に見てもらいたい。いろんなことを感じてもらいたい。

板谷麗 Rei Itaya

「ache」



タイトルの「ache」は、痛み・疼き・強烈な感情・熱望という意味で私が写真を撮る動機を言い表したもの。ストレートに撮ったはずの家族や友人の写真に違和感をおぼえることもある。目の前の人のことをもっと知りたくて、一人一人と向き合いながら撮影してきた。

〈質疑応答〉

●鈴木：個展プランで義理のお母さんとの新しい関係を撮りたいと言うことだが？

○板谷：近く結婚する予定。この展示にはまだない。

●小林：モチーフは結婚式などハッピーなものもあるのに、全体では不幸っぽく見えるけど？

○板谷：起こった出来事を撮るのではなく、家族がそれぞれを意識したりしなかったり、その時の気持ちを撮っている。

清水裕貴 Yuki Shimizu

「tky ↔ almgrd」

その時間その風景の中にいる私が写真を撮っても、その時感じた情動は写真にうつらない。その彷徨っている情動を蘇らせたくて、物語をつくった。写真を見る人にも分かりやすく穏やかに見てもらうために、写真に物語をつけるというスタイルの展示にした。

〈質疑応答〉

●鈴木：撮影者の記憶と初めて写真を見る人のギャップを埋めるために言葉を添えているの？

○清水：撮った私が上がってきた写真を面白いからとただ見せるだけでは不親切だと思う。

●有山：写真と文章をデザインして作品の見られ方を限定しても、見る人によっていろんな見方ができてしまうのでは？

○清水：見方をひとつにもっていきたくて、文章をどうにか写真と一緒に読んでもらおうと、この展示スタイルにした。

●光田：写真1枚1枚は魅力的だけど、写真の魅力が薄まって見えてしまう展示になってしまった？

○清水：自分でも写真の力が弱まっていると思う。

丸山勇樹 Yuuki Maruyama

「光野」

自主映画の現場でムービー撮影をした経験から、照明を焚いて撮影することに興味を持った。故郷の夜の風景にライティングして撮影したらどう写るのかと思い、夜な夜な出かけて撮った。自分が小さい頃から住んでいた町が光によって違った風景に一変して見えた。

〈質疑応答〉

●姫野：写真の中の風景に写り込んでいる杭などは合成したものなのか？

○丸山：杭はもともとあったものだが、照明を下から焚いて杭だけに当てて撮った。

●鈴木：ライティングすることが目的なのか、撮りたい場所があってライティングするのか？

○丸山：懐かしい場所とか撮りたい場所がまずある。そこでライティングを試行錯誤する。

●有山：カメラは何を使っているの？

○丸山：GX200という小型のデジタルカメラ。現場で何度も撮り直すのでフィルムでは無理。

■審査員の感想

ファイナリスト6人のプレゼンテーションが終わり、ここからは菅沼さんが進行。各審査員に全体的な感想を聞いた。光田さん：「審査も応募傾向も毎回違っている。今回は社会的なテーマがなかった代わりに、家族というテーマが多かった。今の世の中で、あらためて家族が重要なのだと思った」。小林さん：「家族とか被写体とどう向き合うかを皆さんが突き詰めていると思う。全員傾向がバラバラで、どの作品がグランプリになってもおかしくない。自分も撮る人間として誠実にジャッジしたい」。有山さん：「グラフィックの審査と違い、今回は展示を見ただけではジャッジが難しく、まだ決まっていない。プレゼンテーションを聞いてみて、だんだん絞り込めてきた」。姫野さん：「新鮮で面白い写真が多く、どの作品も魅力がある。どの表現、テーマであれ、それぞれが新しさを表現しようとしている点を評価したい」。鈴木さん：「正直言うとポートフォリオのほうが断然面白かった。それに比べて展示はずいぶんギャップがあった。ひとつ不安なのは、みんな“これくらいで伝わる”と思っているふしがある」

続いてファイナリスト一人一人についての感想を聞いた。まず、○芹川さんの作品について。小林さん：「お母さんの手術の跡の写真とか怖くてインパクトがあるけど、逆に楽しく見えてしまうおもしろさがある。不安といえば、家族を撮るという個展プラン。今回のような良さが出るか心配」。姫野さん：「最初からすごく好きな写真。家族のトラブルを表面的に撮るのではなく、お母さんを通して家族が抱える問題を撮っている」。有山さん：「タイトルもテーマも写真もいい。プリントのクオリティはいまいちだが、好感が持てる。本人のキャラクターもよかった」。鈴木さん：「偶然写ってしまった素朴さもある。一見怖い表現だが、滑稽さも出ている」。○櫻井さんの作品について。姫野さん：「正直、ポートフォリオのほうが面白かった。写真に力があって、お互いにボルテージが上がっている感じが伝わってきた」。小林さん：「見たくないけど、つい見ちゃうというのが魅力的。ちょっとタガを外した感じが良かったが、展示にそれが出ていなくて残念」。光田さん：「この中で一番の問題作。犯罪スレスレというくらい反社会的な作品。その反道徳的な魅力が展示には出ていなかった」。有山さん：「ぎりぎりファイナリストに残った作品だったが、何とも言えない気持ち悪さが良かった。それが展示に出ていないのが残念」。○清水さんの作品について。光田さん：「すごく良い作品だけど、展示方法は難しい。何気ない写真だが、サブリミナルに浸透してくる不思議な魅力がある」。姫野さん：「写真そのものがすごく良い。イメージの力が素晴らしい。だから、言葉はなくてもいいと思った」。小林さん：「きっと言葉がなくても成立する作品。写真と言葉は伝わるスピードが違うので、言葉があると不利なのも事実。だけど、言葉が入っていてほしいと僕は思う」。有山さん：「この中で一番、言葉にしづらい写真。今までありそうでない写真。いろんなことをやらなくてもいいのに、あえてトライしているところが魅力」。鈴木さん：「プレゼンテーションでは“写真だけでは伝わらない”と本人が言っていたが、そうでもない。写真自体にも力のある人」。○池崎さんの作品について。光田さん：「テーマもすごく良い。展示も完璧ではないが。おもしろい工夫をしている。写真1枚1枚が独立していて、いろんな角度から見られる作品」。有山さん：「何とも言えないユーモアが好き。ただ、いろんなことをいっぺんにやり過ぎている。もう少し写真をしっかり見せられたかも」。鈴木さん：「深夜テレビのようなB級感が何とも言えない魅力。この展示は写真1枚1枚の存在感を消したがっているのかも」。姫野さん：「作り込んでいるけどあやうさがある。その狭間にいるような不思議な面白さがある」。○板谷さんの作品について。鈴木さん：「真っ向勝負をして、写真と向き合っている。ポートフォリオでは緊張感があって良かったが、展示ではその良さが消えていてもったいない」。姫野さん：「ポートフォリオには透明な緊張感があって魅力的だった」。光田さん：「最初、acheというタイトルから家族の写真だとわからなかったが、瞬間をとらえた一人一人の顔の写真には力がある」。小林さん：「好きな写真だが、テーマとして難しいことに挑戦していると思う」。○丸山さんの作品について。有山さん：「良い意味でドライなところが新鮮に感じた。写真と光という単純な関係に焦点をあてていて、文学的な部分を意識的に排除しているところに好感が持てる」。光田さん：「中央の顔に光が当たっている写真が好き。実験的でデジカメらしい面白い作品」。小林さん：「僕らから見て、新しい世代だと思う。デジカメの使い方、フィルムではできない表現、言葉にしづらいが良い意味でつかみどころのない魅力がある。言葉にしづらいことを追求しようとしている」。鈴木さん：「結局、これは光を撮っている作品。道や風景は背景。背景の選びが上手く、バランスがいい。面白いが、ある種、偶然がうまく重なっているところがある。同じように別の場所で撮るのは結構難しそう」。

■審査員による投票

全体的な感想、ファイナリスト一人一人に対する感想を聞いたところで、進行の菅沼さんが各審査員にグランプリ候補として推したい人を3名ずつ挙げてもらった。結果は……

有山／櫻井　清水　丸山
小林／芹川　清水　板谷
鈴木／清水　板谷　丸山
姫野／芹川　清水　池崎
光田／清水　池崎　丸山

票を集計すると、
清水5票／丸山3票／芹川2票／池崎2票／板谷2票／櫻井1票

「清水さんが満票の5票を獲得しましたが……」と進行の菅沼さんが得票結果を報告。票がばらついてしまったので、ここで上位得票者による決選投票をするかどうかを判断するために、各審査員に1位票を発表してもらうことになった。さて、その結果はなんと、有山さん以下全員が清水さんをイチ押しに挙げる。「これはもう決定でいいですか」菅沼さんが各審査員に同意を求めると、異論は出ない。「第5回写真『1_WALL』のグランプリは清水裕貴さんに決定しました！」と宣言して、満員の会場から大きな拍手が沸き起こった。グランプリに選ばれた清水さんが「一年後の個展どうしよう？　ということが頭に浮かびました。今回の展示は会場の一部だけのものだったので、個展プランをもう一度練り直したいと思います。グランプリに選んでいただき、すごくうれしいです。ありがとうございました」と挨拶。再び審査の行方を見守った会場の見学者から祝福の拍手が起こり、公開審査は幕を閉じた。

■出品者インタビュー

清水裕貴：グランプリは素直にうれしいです。“物語で写真を導く”という写真の新しい見せ方を確立したいと思っています。審査員の方にも指摘されましたが、今はまだ肩肘張った展示に見えるようなので、もっと自然なスタイルで作品を見せられるようにしたいですね。一年後の個展では、何の予備知識もなく見る人に、もう少しナチュラルに写真を見せられるようにしたいと思います。

丸山勇樹：清水さんのグランプリは当然だと思います。今の自分の実力ではまだグランプリを獲らなくてよかったんじゃないでしょうか。また次の挑戦として頑張りたいです。2分間のプレゼンテーションは難しいですね。これも次回の課題にして、チャレンジします。

櫻井龍太：審査の過程では誰がグランプリになるかわからなくて、緊張しました。展示もプレゼンテーションも、やりきった感はあります。審査員の方に言われたことをもう一度よく考えてみたいと思います。今回展示していろんな受け取り方があるとわかったのが収穫でした。

芹川由起子：一次審査からポートフォリオレビュー、展示、最終プレゼンテーションと、今日まで長丁場でした。緊張しましたがプレゼンテーションで言いたいことは言えたと思います。いろんな表現の写真があって面白かったです。もっと技術を高めるために修業の旅に出ます。

池崎一世：一口で写真と言っても、いろんな切り口、アプローチがあって、すごく面白いですね。鈴木さんに「写真1点1点をしっかり見せたくないのでは」と言われたことは、まさしくその通りでした。昼間働くシングルマザーですが、今後も作品を発表していきたいです。

板谷麗：展示で人に写真を見せるのは初めてだったのですが、そのチャレンジに対してわかりやすくアドバイスしてもらえたことは良い機会になりました。“写真の持つ力”に魅力を感じているので、人と接することで得られることは本当に多くのものがあると思っています。

<文中一部敬称略　取材・文／田尻英二>

■お問い合わせ先
株式会社リクルート　ガーディアン・ガーデン
〒104-0061　東京都中央区銀座7-3-5　リクルートGINZA7ビルB1F
TEL:03-5568-8818　FAX:03-5568-0512
HP:http//rcc.recruit.co.jp　twitter:@guardiangarden

Guardian Garden
PRODUCED BY RECRUIT